

イギリス・スタディーツアー報告書



鮫島香那（国際文化学部 2 年、リーダー）
倉本真夢美、中原麻衣、村上遥香、玉川佑香、高嶋奏風（以上、国際文化学部 1 年生）

高見早苗（国際文化学研究科修士課程 2 年生）

国際文化学部国際文化学科 異文化交流論研究室

2009 年 3 月

<日程表>

日	行程	宿泊先
3月1日(日)	10:00 関西空港集合 11:55 KLM オランダ航空 868 便 16:15 アムステルダム・スキポール空港経由 18:55 スキポール空港発 KLM1027 便 19:15 ロンドン・ヒースロー空港着 ロンドン市内へ	ロンドン (ロイヤル・ノーフォーク・ホテル) Royal Norfolk Hotel
2日(月)	ビッグベン、ウェストミンスター寺院、中華街、トラファルガー・スクエア、ナショナル・ギャラリー、自由行動 (ミュージカル等)	同上
3日(火)	大英博物館、ロンドン塔、自由行動等 19:03 発の列車で、リーズへ 21:34 着	リーズ (ディスカバリー・イン) Discovery Inn Leeds
4日(水)	午前: リーズ市役所訪問 (フェアトレードの学校集会に参加) 午後: 開発教育センター、DEC (Development Education Centre) 訪問	同上
5日(木)	午前: 早朝の列車でヨークへ。ヨークミンスター寺院、シャンブル、ヨークトレイル等 午後: 15:00 リーズ大学訪問	同上
6日(金)	午前: 小学校訪問 (Moor Allerton Hall Primary School) 午後: リーズ市内のフェアトレードトレイル 18:05 発の列車でロンドンへ 20:21 着	ロンドン (プレジデント・ホテル) President Hotel
7日(土)	自主企画による行動 (ロンドン、オックスフォード) ミュージカル等	同上
8日(日)	4:30 ホテル出発 5:30 チェックイン 8:40 ロンドン・ヒースロー空港発 KLM1002 便 11:05 アムステルダム (スキポール空港経由) 15:25 スキポール空港発 KLM867 便	機内泊
9日(月)	10:25 関西空港着	

<目次>

1. リーズ市役所でのフェアトレード研修会	村上遥香
2. 開発教育センター（DEC）を訪問して	玉川佑香
3. 小学校訪問(Moor Allerton Hall Primary School)を訪問して	鮫島 香那
4. ヨークのフェアトレード・トレイル	鮫島 香那
5. 古き良き街ヨーク	倉本 真夢美
6. Liverpool を歩いて	高嶋 奏風
7. ウォーターフロント再開発をこの目で見ると	高嶋 奏風
8. ロンドンのマーケットを歩く	村上遥香
9. ロンドンで2つのミュージカルを見る	玉川佑香
10. フェアトレード・フォートナイト	高見早苗
11. リーズ大学訪問	高見早苗
12. 世界遺産を見る	中原 麻衣

＜謝辞＞

イギリスへのスタディーツアーは4回目である。もう10年も前になるが、1999年にゼミ生7人とともに香港経由でロンドン、サリー、スターリンなどを歩いた。中国に返還された香港の事情を調べ、当時の山口県香港駐在員や山口銀行香港支店、中文大学などで聞き取りを行なったのち、イギリスに渡った。サリー大学やスターリン大学で交流を行い、フェアトレード事務所も訪問している。フェアトレード会議に出席して、中央アメリカのベリーズから来ていたカカオ農家の話を聞き、ウガンダの紅茶生産工場長の説明に耳を傾け、ワークショップに参加した。フェアトレードのことはその後も授業に取り入れていたが、本格的にフェアトレードを研究テーマとする大学院生(高見早苗氏)に出会ったことで、今回のスタディーツアーが実現した。まずは、今回のスタディーツアー実施のきっかけをくださった高見早苗氏に感謝したい。

実際にどこを訪問するかについては、リーズ大学大学院で学ばれ、リーズ開発教育センターでも働かれた経験を有する浜田祐子氏に大変お世話になった。リーズ大学の恩師となるウィリアム・ヤング先生(Leeds University, Earth and Environment Department)をご紹介いただいたのをはじめ、リーズ開発教育センター、リーズ市役所、リーズのNGOやフェアトレードショップ、ヨークの開発教育センターやNGOなど、訪問先リストを提供いただいた。今回の訪問ではリーズ大学(フェアトレード・ユニバーシティ)、リーズ開発教育センター、リーズ市役所(フェアトレード研修会)、リーズ市役所の紹介で小学校(フェアトレード・スクール)、ヨークのフェアトレード・トレイルの訪問などが実現した。いただいたリストからアポイントメントのお願いをすると、「祐子の友人ね!」と言って、どなたも快く訪問を受け入れてくださり、貴重なお時間をくださった。浜田祐子氏、ならびに、私たちの訪問を歓迎してくださった方々に厚く御礼申し上げます。

さて、先にも触れたが、2回目、3回目のスタディーツアーのことを少し記しておきたい。2回目(2003年)は本学に赴任していた国際交流員ロバート・クーパー氏とともに、16名の学生たちとロンドン、リーズを歩いた。このときのテーマは「多民族国家イギリス」であり、マイノリティのコミュニティに足を踏み入れることができた。第3回目(2004年)は同じく国際交流員のビクトリア・ベントリーさんと9名の学生、山口日英協会の社会人2名と一緒に、ロンドン、ケンブリッジ、シェフィールドを歩いた。このときのテーマは「パブリック」であった。ハロースクール、イートン校、地方裁判所、保育所、老人介護施設等を訪問し、パブリックの意味と市民意識について考えた。このときの学生たちはその後、アメリカやカナダ、スペインなどに交換留学をしたり、大学院を経て青年海外協力隊員になったり、国際結婚をして海外に出たりもしている。

大学時代に異文化に触れる旅をするのは大切なことと考える。同時に、普通の旅ではなく、スタディーツアーという形での学びの旅は次へのステップになると思う。異文化

交流論研究室のスタディーツアーは、タイ、インドネシア、シンガポールといったアジア諸国と、ヨーロッパ（イギリス）とをできるだけ交互に組み入れるようにしている。次に出かける先、学ぶテーマについて、学生たちと考えているところである。

異文化交流論研究室 岩野雅子

1. リーズ市役所でのフェアトレード研修会

村上遥香

リーズ市役所を訪問し、フェアトレードについて学ぶための小学校集会を見学したことについて報告する。集会のプログラムの流れは次の通りである。まず会場では二つのブースが用意されており、それぞれの場所で貿易ゲームとアクティビティ・ゲームが行われる。参加者は前半組、後半組の二グループに分かれ、両方のプログラムに参加する。また休憩時間には、フェアトレードのジュースやコーヒー、クッキーの試飲、試食が行われた。

貿易ゲームは、経済格差がどのようにつくられ、どのように広がるのかを疑似体験することができるゲームとなっていた。児童にはバナナの生産者として、紙でバナナを作り、それをバナナ会社に売りに行ってもらう。ここでは参加学校別に6グループに分かれており、売買の過程で、それぞれのグループには売上に有利、または不利な条件（例えば、不利な条件として“学校に本を置くために£10必要”など）を与え、最終的な売上高にばらつきを生じさせた。不平等な条件を設定しておくことで、有利な条件のグループはより豊かに、不利なグループはより貧しくなる。このようにして、児童たちは経済格差の疑似体験をし、また、現実の世界でも同様の格差があることを教えられた。もう一つのプログラムでは、インストラクターと共に体を動かしながらいくつかのアクティビティを行った（例えば児童に、先進国と開発途上国の人々の様子を表現させるなど）。



（子ども達がつくったバナナ。
これでトレードをする）



（ワークショップの様子）

このプログラムには、フェアトレードについての教育がなされている学校（フェアトレードスクール）、これから学び始めようとしている学校など様々な小学校が参加しており、それぞれの学校によって児童の知識には大きく差があるようだった。やはり、フェアトレードについて多くを学ぶ児童は、多くの知識を持っており、質問に対して積極的に手を挙げ、受け答えをしていた。その回答の内容も驚くほど詳しく濃いものであり、フェアトレードスクールの教育の効果を見ることができた。しかし、そのことに感心する一方で、プログラム内容に“押しつけ”のような面も見られ、今回のプログラムに不安も覚えた（例えばアクティビティにおいて、インストラクターは「フェアトレードはいいものである、だから君たちはフェアトレードを買うように周りの人に言って広めるんだ！」と主張した）。

国際問題を考えさせるときには、指導者の“意見”を言うことがあっても、それを“答え”として押し付けるべきではない、と私は思う。イギリスは日本に比べ、圧倒的にフェアトレード教育が進んでいることは明らかであり、感心すべき点ではあるが、その教育内容や指導者としての質などの課題があるように感じられた。

(フェアトレードを演じた俳優)

(ランチ風景)

(フェアトレード・ランチ)



2. 開発教育センター（DEC）を訪問して

玉川佑香

イギリスのリーズにある開発教育センターを訪問した。私は開発教育センターと聞いて、高層ビルの1室、もしくはかなり大きな施設なのではないか、と勝手に想像していた。しかし、開発教育センターは、私が思っていたよりもこぢんまりしていて、イギリスの中でも移民が多く住む街の一角にあった。私たちを迎えてくださったのは、プロジェクトコーディネーターのアダムさんという男性の方であった。

まず、開発教育とは、1970年から1990年にかけて発展した教育である。国際協力に携わっていたNGOによって、旧植民地の抱える問題への理解とその解決をめざす教育活動として始められ、イギリスでは70年代に多数の開発教育センターが設立され、新しい教育のカタチとして、徐々に学校教育へと根ざしていった。事例がない手探り状態の中での開発教育の促進となったが、「国際教育」とひとくくりにはせず、社会的側

面、身体的側面、個人的側面を捉え、国際問題と自分たちとをより身近に感じることができるような教育のカタチを目指したという。

具体的に、開発教育センターが行ってきた活動として、ワークショップや各地のイベントの開催などが挙げられるが、それ以外にも教材作りが挙げられる。実際に、開発教育センターの一角には、作られた教材がたくさんあった。イギリス



の初等教育は、日本の初等教育と違ってカリキュラムに従って、教師自身が授業内容を

組んで教育を行うため、教科書がない。そのため開発教育センターが作った教材を使って国語の時間に国際問題についての文章を習うこともあるという。実際に教材を見せてもらったが、現実に行っている国際問題にいきなり触れるのではなく、「自分たちの幸せは何が作っているのか？」ということを考えさせ、子どもたちに自分と国際社会の関係性や価値を理解させることに重点を置いた内容であった。このような教材を通して、自分にとって1番価値のあるものを考えさせ、そこから国際社会へと視野を広げていくという策略なのである。

また、それだけでなく、開発教育のできる指導者を育成するための勉強会など、リーダーシップの育成も行っているという。一人の地球市民として、ただ単に暮らすだけではなく、国際社会において問題点を見つけ、それを解決するためにはどのようなことをすればいいのかを考える力を持った子どもたちを育成するために必要な知識や社会問題を、子供たちの指導者（教師）に対して教えるのだという。その成果として、フェアトレードについての学校教育が始まったとも言えるのだという。

今回の訪問では、国際社会に目を向け「させる」のではなく、自然と子どもたちが国際社会に目を向けるようになるための「興味」を持たせるために、思考を凝らし、模索状態で試行錯誤しながら開発教育を広めてきた軌跡を見ることができた。



(開発センターのアダムさん)



(開発教育教材が並ぶコーナー)

3. 小学校訪問(Moor Allerton Hall Primary School)を訪問して 鮫島 香那

リーズに滞在中、郊外の小学校を訪問した。この小学校は「フェアトレード・スクール」として認定されている。一般的な小学校との違いは、授業の中に開発教育を導入していることだ。その開発教育のなかの1つとして、フェアトレードがある。また、郊外に位置していることから、85%の子どもたちがマイノリティで多民族という特色をもっている。例えば、パキスタン・インド・アフリカ・中国といった白人を含めてカリビアンなどほとんどの民族が居住している場所なのだ。

イギリスは、日本と違って5歳から義務教育が開始されている。日本でいうと幼稚園の園児らもすでに義務教育を受けているということだ。また、イギリスでは教科書もない。そして学習指導要領のような指定されたものもない。なので、イギリスの教師らはカリキュラムの組み立てをすべて自分でやっている。そのため、教師によって授業に差



がでてしまう。しかし、教科書のない授業でいかに生徒たちに楽しく学習させ理解させるかというのは枠組みのない自由な教育であるイギリスの良い特徴だといえる。

イギリスの小学校の中にはフェトレードを教育していることだけをアピールする学校はない。この学校は、多民族というもののうちの1つでフェアトレードを取り入れているのだ。このような学校はイギリス中に増えており、誇りを持って活動をしている。また、その活動の成果から賞をもらえることもある。教育以外にも、この小学校の建物の隣には高校があり、小学校の中には保育園があるといった特徴があり、親は毎日高校にどうしても子ども連れて行かないといけないため、遠くからでも小学校に子どもがくる。

小学校の中を見学していると、いろいろな所に開発教育の活動を見ることができる。廊下の壁にはたくさんの小学生が書いたポスターが貼ってある。また熱帯雨林を表現した窓も緑色の廊下や自由に表現した絵が飾られていた。そして、みんなでじゃがいもを植えて観察している場所もあった。ポスターを描くことで自分の意見を主張し、自分の理論を人に説得させるのだ。高学年になると、学内で悪いと思うことをみつけ、注意して回することもするらしい。他にも街でフェアトレードをさがしたり、大きなイベントに参加したり、ビンゴの賞品をフェアトレードの商品にする活動をしている。そして子供が大人へフェアトレードを伝えているのだ。ビンゴの賞品をフェアトレードの商品にするというのはとてもシンプルなことなので、1つ1つの商品について理解でき、小さい子でもすぐ理解することができる。さらには、小学生が花でおもし



ろいことをして1ポンドのお金をもらい、それをパキスタンに支援するといった活動も積極的に行っている。

多民族の理解として、私たちが訪問した3月6日は、カリビアン **special day** だったらしく、5歳のクラスではカリビアンの服装とメイクをして文化や特徴を体験していた。先生方もカリビアンに変装し

ていてわかりやすく楽しみながら授業をしていた。他の学年では、踊りを披露したりしたそう。

これだけ多くの民族の子どもが通う小学校では、その学校ならではの問題もある。まずは宗教の違いだ。バックグラウンドが違うから **Holiday** も違う。平日でも宗教によっては祝日だったりするために出席率がよくないことがある。だからできるだけ学期中は **100%** を目指している。つぎに小学生の中の **60%** は英語とは異なる母語の民族のため、英語をしゃべることができない子がいることだ。家では母語をしゃべるために小学校で学習についていきにくくなる子もいる。そのため保育園から英語を教えることからはじめ、小学校にあってから学習に支障が出ないようにしているのだ。子どもだけでなく、親が英語を話せない人が多い。そのため学校のスタッフのなかにはバイリンガルがいるが、スタッフも離せない言葉の民族もいる。だから地域と連携して宿題の手伝いや、親のための英語講座や手伝いを行っているそう。

小学校を訪問したことで、今現在起こっていること、問題になっていることを教材にして、体験学習をしていることを日本の教育にも導入していくべきだと思った。1つ1つの教室を見てまわっていると、どこの教室も机がひとつひとつばらばらになって黒板を見ているのではなく、必ずグループになっていた。そして話し合いを欠かさず行っている。日本について先生が質問すると、電話や車の生産量のことを答える小学生が多くいて驚いた。日本の小学生がなかなか発表しないのとは反対にイギリスの小学生は積極的に挙手して発表をしていた。先生方もスクリーンをつかった授業をしたり、絵を描く授業をしたり、体験型重視の教育を目で見て感じることもできた。日本では見ることのできない教育事情をしっかりとみることができた。このようにフェアトレード・スクールとして認定されては

いるが、これまでのイギリスの教育を減らしたり崩したりすることなく新しい開発教育を導入できていることにも驚いた。なにか減らさないと新しいことをするのは難しいだろうと思っていたが、数学や文学、理科など多くの授業に工夫して取り入れているらしい。私が小学生だったときには全くなかったこのような教育にもっと興味を持つ経験となった。これからさらに教育に関する本を読んだり聞いたりすることで国によってどんな特徴があるのか知りたくなった。また、日本のように学習指導要領のないのは先生方にとって大変かもしれないが、自由だからこそ楽しく体験型の工夫された授業を行えることに魅力を感じた。



4. ヨークのフェアトレード・トレイル

鮫島 香那

リーズでは、大学院生の高見さんと一緒にフェアトレードのお店を探しに街を歩き回った。フェアトレード・トレイルといい、ヨークの開発教育センターが発行している地図を手に、フェアトレード・ショップを巡る教育ツアーである。イギリスの児童や生徒向けに発行されており、特に注目すべき点やクイズ、ショップで聞いてみるとよい質問などからなっている。

イギリスの道は1つ1つに必ず名前があって、地図1枚もっているとほとんど目的地に着くことができる。今回は聞いたお店の場所が曖昧だったため迷ってしまうこともあったが、せっかくなので興味をそそられたものは全部寄り道をした。すると、リーズの古い教会では桜の花が咲いていたり、思わぬところで国際協力のチャリティーイベントをしていたり、フェアトレードフェアが開催されていたりと、見つけ物がたくさんあった。エコなお店として古着や古本のお店にも立ち寄った。エコに貢献していることを示すために、パネルもしっかり掲示されていた。通りすがりの人に道を尋ねると、必ず教えてくれた。



1つ目に立ち寄ったのは、フェアトレードのコーヒー豆を使ったカフェ。ここではカップにまでフェアトレードマークがプリントされていた。そして2つ目は、フェアトレード商品を扱っている店。チョコレートからバッグまでありとあらゆる商品が売られていた。しかも、その日はリーズ市内でいろいろなフェアトレードのイベントが開催されていて、お店の方にフェアトレードバナナをいただいた。毎年同じ日に、どのくらいの人フェアトレードバナナを食べているかカウントをしているらしい。地図一枚もって街を探索してみるのもおもしろいと思った経験だった。

ところで、ヨークはシャンプルという中世のマーケット通りが残っている素敵な街である。街の回りをぐるりと城壁が取り巻いていて、城壁の上を歩いて一周することもできる。中世の街といえば、最終日に列車に乗ってオックスフォードへ向かった。目的は、中世に形成された大学の街に行ってみることとお気に入りの本の1つであるハリー・ポッターの撮影があった場所を実際に見ること。ここでも駅につくとすぐインフォメーションセンターへ行き、無料のパフレットについている地図をもらい、一人で街の中を歩き回った。町中に college がある。街中に学生と観光客があふれていた。他にも教会の中では街の人たちが楽器の演奏練習をしていて、のどかな雰囲気も感じられた。その日はオックスフォード大学のイベントがあり中に入れない建物が多かったが、外から見ていると学生と家族や教授らが肩を組んで写真を撮っていて、オックスフォード大学の偉大さが伝わってきた。街中が大学で街中が大学に誇りを持っていると感じた街だった。

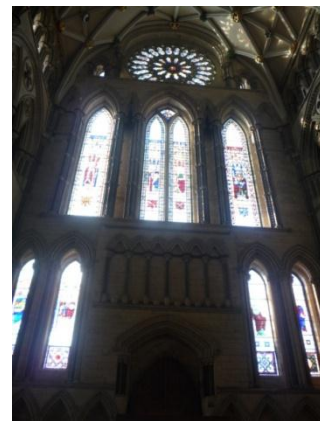
5. 古き良き街ヨーク

倉本 真夢美

ヨークはロンドンから電車で約2時間、イングランドの北部に位置する都市だ。城壁の上を歩いて街をほぼ1周できるという古い城壁に囲まれているという特徴がある。ヨークの城壁の歴史は紀元1世紀、ローマがヨークを占領したときに城壁で街を囲み要塞したことから始まった。今では英国最古で、保存状態が最高のものになっている。私たちはヨーク駅から数分歩き、城壁に上り街に入って行った。城壁は長い一本道が続き、道の片側には手すりなどがなく、昔からそのままの状態で置かれているように感じた。少し高い城壁からヨークの街並みを遠くに見た時、このスタディツアーで訪れたロンドンやリーズに比べ、古い街という印象を受けた。ロンドンやリーズも、日本に比べれば街並みが全体的に落ち着いた色をしているが、ヨークの建物、道路、景色はなんとも歴史深い雰囲気を持ちとても魅力的だった。



一本道の城壁を降り、橋を渡りさらに歩くと、ヨークミンスターに到着した。ヨークには高い建物が少ないので、私たちが歩いた城壁や街のどこからでもヨークミンスターを見つけることができた。ヨークミンスターは、英国最大のゴシック様式の大聖堂であり、ヨークで最も有名な建造物である。13世紀頃に建てられた古い大聖堂だ。ヨークミンスターに入るとすぐに、大きなステンドグラスが見える。ヨークミンスターには、有名なステンドグラスがいくつかあり、その大きさと美しさに私たちは見とれた。その時どこからか聖歌隊の歌声が聞こえ、なんともいえない幻想的な雰囲気に包まれた。



その後、フェアトレード・トレイルを始めた。平日の昼間にも関わらず、町中友達と遊んだり買い物をしている人でにぎわっていた。トレイルでは、フェアトレード商品を扱う店を見つけ探索することが目的だった。しかし結果的に、わざわざ探さなくても街を歩いているだけでフェアトレードやチャリティーを取り扱う店は次々に見つかった。それほど多くの店がフェアトレード商品を取り扱っているということがわかった。私が一番最初に訪れた「Shared Earth」という店では、仏像のようなアジアンテイストな置物が売られていた。



店員さんに聞くと仏像などはとても人気のある商品だと言っていた。このほかにも食べ物や衣類はもちろん、とても多くの種類の商品があることに驚いた。日本でも有名な「スターバックス」もあり、店の前や店内の看板には、フェアトレードをアピールする内容が書かれていた。私は約 10 か所のフェアトレードやチャリティーを取り扱う店を見つけたが、どの店にもだいたい客がいた。日本ではフェアトレードショップはまだ数も少なく、認知度も低いためフェアトレード商品を買う人も少ない。それに比べて、イギリスでは消費者にとってフェアトレード商品が身近にあるということが、見てわかった。

城壁や、建造物など古いよき街並みを残し、一見「古い街」に見えたヨークは、実は新しいことを取り入れた進んだ街だった。私は、この街の姿こそ理想なのではないかと思う。日本は、どちらかといえば次から次へと新しいものに目を向け、古いものはどんどん変えていくという傾向にあるように感じる。大切なのは、自分が住んでいる場所に誇りを持ち、その良いところを守りつつ新しい時代に進んでいくことだと思う。そのお手本がまさにヨークであると感じた。

イギリスは、「ジェントルマンの国」というイメージがあったが、まさにその通りだと感じた。スタディツアーで訪れたどこの街でも、地図を広げて道を探そうとするとすぐに地元の人が話をかけてきてくれる。また、大きいキャリーケースを持って階段を上っている女性に声をかけ、荷物を持ってあげている人を何人も見た。もちろん全員がそうではないが、私たちのようなアジア人にもとても優しくしてくれる人が多く、「レディーファースト」という意味を身をもって実感した。このようにイギリスでは女性の地位を大切にしたり、フェアトレードが進んでいたり、フェアという精神が強い。それは、歴史の中でイギリスが様々な国に奴隷制度を取っていたということからの反省や懺悔の思いから生まれているものだという。約一週間イギリスに滞在して、正直「ちょっと気を遣いすぎではないのか？」と思ったこともあり、私にとってはイギリス人のフェアの精神は気持ちいいが、少し違和感を覚えるほどだった。日本人とイギリス人の考え方の違いを感じる旅となった。

6. Liverpool を歩いて

高嶋 奏風

3月1日からスタートしたイギリススタディツアーの4日目、通常の日程では、午前ハリーズ市役所訪問、午後は開発教育センター訪問だったのだが、みんなの勧めもあり、自分は昔からの「憧れ」の町であった Liverpool に行くことにした。

まず Liverpool という町についてだが、以前まで自分の内にあった情報は、イングランド北西部のマージーサイド州の港都市。ビートルズをはじめとする数多くのミュージシャンを輩出しており、リバプールサウンドと呼ばれるジャンルも存在する程であり、そして学生都市。また、市街の世界遺産を生かして芸術政策にも力を入れており、文化都市として有名であるというくらいだった。

Leeds 駅から列車に乗り席に座ると、スタディツアー参加者では男が自分ひとりであ

ることから何処か感じていた息苦しさや心許無さからの解放感と、異国の地を一人で歩くという不安と期待感が湧き上がってきて、傍から見ればとても挙動不審だったと思う。途中、マンチェスターを經由し、人が多少乗ってきても、あえてこの一人のアジア系の男の隣に座る人は居なく、日本で外国の方の隣の席が空いていたり、座ったりするのをためらう事があったりするのを思い出し、今、自分がその立場、「マイノリティー」であることを強く意識した。

すると、「コンニチワ」と、何処かアクセントの変な日本語で一人の青年が話しかけてきた。自分はとても驚き、「お金を取られないように」とか「とりあえずパスポートだけは・・・」と身構えた。青年は隣に座り、かなり不完全な日本語で話しかけてきた。不完全ながらもその青年の日本語の意は汲み取れ、日本語で返答する。すると困った顔をする青年。どうやら、日本語がそんなにわかる訳ではないようだった。たどたどしい日本語で話すイギリス人、たどたどしい英語で話す日本人が会話をしているという、見るからに可笑しい光景がそこにはあった。

この青年、マックさんはLiverpoolの大学生で、国際協力系のサークルに属しているらしく、スタディツアーでイギリスに来たことを伝えると、「今日はALBERT DOCKでフェアトレードについての意識調査をやるんだ。よかった参加してよ。」と誘われた。了承し、リバプール駅に到着と同時に一時別れた。

もう少しで昼の12時になろうとしていた時、Lime Street Stationから歩き出した。このLime Streetという通りは、ビートルズの“Maggie Mae”とい曲の歌詞に出てきているので、「ここかぁ・・・」なんて思わずニヤケながら歩いていた。するとTHE EMPIRE THEATREやADELPHI HOTEL、ジョン・レノンが生まれた病院など、中学生の時読み漁ったビートルズ関連書に記されていた建物が目に付き、「これは夢なんじゃないだろうか」と本気で疑った。そういう間に、ローマ・カトリック・メトロポリタン大聖堂(The Roman Catholic Metropolitan Cathedral of Christ the King)ⁱに到着した。全体が入らないほど大きく、写真に写らないほど美しい。



イギリスで珍しいローマ・カトリック教会でバチカンのものに匹敵する規模のものを作ろうとしたらしい。ここ40年くらい前に完成したものだから凄く現代的。光を巧く使って神秘さを醸し出しているのに感動した。教会というイメージを覆されて、口あけて天井のステンドグラスみていたら、神父さんが「どうだい。素敵だろう。」と微笑んでくれた。

その後、リバプール大聖堂(Liverpool Cathedral)に到着。こちらは一点



変わってゴシック。イギリス最大のアングリカン大聖堂で、イギリス最も高いゴシック様式のアーチ、国内最大のオルガン、国内で最重量のベルがあった。市民にはこちらのほうが親しみがあるらしい。



その後郊外へ、出てビートルズの歌のタイトルにもなっている「PENNY LANE」、
「STRAWBERRY FIELDS」、ST. PETER'S CHURCH & CHURCH HALL の墓地にある「ELEANOR RIGBY」
の墓石、その他、地図には載っていないので、本で読んだ記憶と、人に尋ねて得た情報
を合わせてビートルズ関連の場所を見て歩いた。

その中で強く感じたのが、「日本人」というアイデンティティだ。Liverpool にもチャイナタウンがあり、イギリスの人にはぱっと見で見分けがつかない中国系と日本人。最初は、中国系として扱われる事が多く、その後、日本人である事を伝えたと急に接する態度が良くなったり、こちらに興味を抱かれるという事が多々あった。そして、思ったのが、「もしかしたらこの人が人生で会う日本人は、自分が最初で最後かもしれない」という事だった。そうでなくても、もし、自分がここで、その人に失礼な態度をとったら、その人の中の日本人に対するイメージと情報に自分が大きな影響を与えてしまう、という事だ。何も無理をして「いい日本人」を演じる訳ではなく、言い過ぎかもしれないが「国を背負っている」つもりで行動しなくてはならないと思った。例えばこういう人がいた、過去に日本人にとってもよくしてもらった紳士がいた。彼に道を尋ねたらとても親切にしてくれた。彼曰く「日本に旅行に行った時、言葉も分からない私をととても助けてくれた。だから、君を助けようと思った。」と。もし、その紳士を助けた人がいなかったら、自分はその紳士によくしてもらえなかったかもしれない。もしかしたら、この後自分と同じように、一人旅で Liverpool に来て道を尋ねる人がいるかもしれない。「礼儀」というのは、二者間にだけ存在するのではなく、その後、そしてそのまた後の人達に影響していくものだとして強く心に刻んだ。「旅の恥は掻き捨て」とはよく言うが、それよりも、日本にしようと、外国にしようと「情けは人の為ならず、身に回る」という諺の真意は変わらないという事を学んだ気がする。

その後も、たくさんの文化財や建造物を見て歩き、約束の 16 時になったので、マックさんとの待ち合わせ場所である ALBERT DOCK に向かい、マックさんら 16 人とフェアトレードについての意識調査に参加させてもらった。内容はフェアトレードを意欲的に取り入れている店の前で購入者にインタビューするというものだった。自分は英語が全くなので、質問の内容はカンペにメモし、キャシーさんという女性と一緒にコンビを組んで参加させてもらった。そこで感じたものは、フェアトレードに関する認知度が半端なく高いという事だった。しかし、ある程度は知っているものの、深くは知らない、フ

フェアトレードに疑問点を感じる事がある、その疑問を誰に聞けば解消してもらえるかが分からない、など「広く知ってもらうこと」の弊害がそこにはあることも感じた。

そこでマックさんに、「広く知ってもらう事は良い事だと思うけど、ずれた認識が将来に問題を引き起こさないか？ それについてはどう思う？」と聞いてみた。質問しながら、自分がフェアトレードに何処か嫌悪感にも似た何か分からない疑念を感じていて、その疑念の正体を掴んだ気がした。その正体は、自分が最初にフェアトレードを知ったときに抱いた疑念をすぐ解決できなかったこと、である。自分はその後、自分で調べたり、人に訊いたりしたからその疑念を振りほどけたが、同じように疑念を抱いた人が皆行動を起こすわけじゃない。「疑問だけ抱かせといて放置。それって、無責任じゃない？ 下手したら間違っって捉えられる。それは効率が悪過ぎないか。」ということだ。

マックさんはこう答えた。「君はもうその答えを列車の中で口にしていたじゃないか。君はジョン・レノンが『私は音楽で目を覚まさせるだけだ。その後は自分次第だ。いくなれば種を撒くだけさ。』という言葉が好きだと言っていたよね。あと『Imagine』の歌詞で一番好きなリリックは『You may say I'm a dreamer』だと言っていたよね。それがそのまま答えにならないかな。」と。その瞬間、自分の中で、一気に世界がクリアになった。『You may say I'm a dreamer』とは自分の中で一番大事にしている言葉。何かに打ち込んでいるとき、絶対第三者から言われる言葉「お前、夢でも見ているんじゃないの？」、その時に「君は俺が夢見ているって言うかもしれないが、でも」という様に言ってのける人であろう、というのがいつかの自分の信念だった。それが、何処か理論武装をし、いつしか自分は逆に、「お前、夢でも見ているんじゃないの？」という側に回っていた事に気づかされた。彼らは「花が咲くかどうか分からないが、とりあえず何かしなきゃ絶対に咲かない。咲くかどうかはその花々にまかせよう」ということなのだろう。フェアトレードについての意識調査に参加させてもらい、より深く知れたという事よりも、自分の中で、何処かちょっとずれていた歯車がまた上手くはまった、というような気持ちの喜びがとても大きかった。これは、自分の人生の中でも結構重要な出来事のような気がしてならなく、今度はどういう風に歯車を回していかなくてはならないのか、前向きに考えるきっかけになった。

帰りの列車を待つ Lime Street Station で一人のホームレスの方に話しかけられた。話しかけられた瞬間は、「ああ、俺死んだわ。周りに人も警察もいるし大声出せばなんとかなるかな・・・」と考えていたが、彼は「君は日本人だろ？日本の景気はどうなんだい？それがただ知りたいんだ。」と続けた。取り合えず、帰りのチケットと航空券、パスポートをインナーの隠しポケットに入れ、話をしてみた。その中で印象に残った言葉は、「フェアトレードかい？僕もお金があつたら買うだろうねえ。でも、そういう良いことが出来るのは裕福な人達だけだね。貧しくなったら、安いものを買うだろうよ。買うしかないじゃないか。良いことが出来るのは裕福な人だけで、貧しい人は良いことも出来ない。神様はなんて、意地悪なんだろうね。」という言葉。皮肉で言ったのだろ

うけど、自分の英語力が乏しい以前に「何を言えばいいのか」分からなかった。とにかくこれも一つの現実なのだと、受け入れる事で精一杯だった。だけど、もしかしたら明日は我が身。いろんなことを考えながら、帰りの Leeds 行きの電車に乗った。

実際に憧れの Liverpool を歩いて、この目でいろんなものを見て、聞いて、感じて、精神的にも肉体的にも、ただ「楽しかった」「勉強になった」だけじゃなく言葉にはならないくらいいろんなことを考えさせられる体験だった。総じて、感想としては「疲れた。」が一番適格だと思う。

7. ウォーターフロント再開発をこの目で見る

高嶋 奏風

スタディーツアー最終日、ロンドンでの自由行動の際、高校のときに習った「ロンドン再開発」のそのものをこの目で実際見てみようと思った。よって、その様が顕著に見られるというドックランズ地区を歩いた。

かつてのドックランズはロンドンのドックランズは、テムズ川沿いの複数の港湾・造船所・倉庫から構成されていた。第2次大戦「ロンドン空襲」により、ドック群は集中的な攻撃を受け大きく破壊された。その後、1950年代まで復興に時間をかけ繁栄を取り戻したドックランズであったが、コンテナによる海上運送・陸上運送の物流革命により、船会社は寄航先をコンテナに対応しないドックランズは衰えていった。ドック閉鎖に伴い、再開発が急務となったが、イギリスのウォーターフロント開発は、“鉄の女” マーガレット・サッチャーが1979年に首相の座に就くやいなや始まった。彼女のやり方は、民間資本による旧工業地域の活性化。「特区」を設定して「民活」を利用する、日本流に言えばこんな感じになる。サッチャー氏の指導の下で国家規模の大再開発が実施され、ショップやアトリエが入居。今ではどんな観光ガイドブックにも掲載されている場所になった。

まず、National Army Museum の辺りから、ひたすらテムズ川沿いに歩く。川のこちら側、いわゆる City 側はロンドン塔や教会など歴史的な建造物が多かった。地下鉄ジュビリー線は1999年に延伸し、ウェストミンスター駅から6駅でカナリー・ワーフに着き、東郊のセントラル線にストラトフォード駅で接続した。またドックランズ・ライト・レイルウェイは、東はベクトン方面への延伸が完了しているため交通の便もとてもよく（ただこの日はジュビリー・サークル線がメンテナンスで不通でありちょっと困った。）カナリー・ワーフはヨーロッパ最大の超高層ビル街であり、歩いていて「初めて東京に行き、新宿を歩く田舎者」並みに上を見上げていた。その後、船に乗りテムズ川をくだりグリニッジまで行った。荒廃しグリニッジとデプトフォードは今では交通網の発達の結果通勤至便な場所となり、大規模な再開発が進行していた。

しかし、何処か変な不一致の違和感に襲われた。高級なアパートが荒廃した公営住宅の近くにあるという何処か差別化されていない光景だ。日本に帰ってから調べてみたら、それは都市のジェントリフィケーション現象というものらしい。その現象の理由はドックラ

ンズの再開発での、大規模な不動産ブームとそれに伴う家賃の上昇は、ドックランズの転入者と、家賃上昇で出て行かざるを得ない古くからのコミュニティとの間に、深刻な摩擦を起こしたものであるという。なにか問題を解決しようとするれば、次の問題が浮き上がる。まさに都市というものは生き物だな、と強く感じた。

ツーリストインフォメーションセンターの人に、無粋ながらも「再開発がこのまま進めばこの都市はどうなると思いますか？」と尋ねてみた。すると、彼女は「きっとこの街に住む人、そしてあなた達の様なこの街に訪れる人をより優しく迎え、安心をもたらすものになってくれると思います。」と述べた。再開発はまだまだ進行中だ。彼女の思うような街になってくれるよう自分も願いたい。

8. ロンドンのマーケットを歩く

村上遥香

7日目の自由行動では、まず、アンティークマーケットが開かれている骨董街“カムデン・パッセージ (Camden Passage)”に向かった。このストリートは多くのアンティーク店が並んでおり、その店から出店しているブースも多々あった。この細い路地裏には、約10メートル置きにお店が並んでいるが、このとき雨が降っていたのと、時間が早かったためか、店は少ない印象であった。いかにも年季の入った商品が並んでいたが、いくつかの店には昔のお金や壊れたネックレスなども売られており、その価値は私にはまだ理解できないと思ったため、すぐに退散することにした。



次に、バラ・マーケット (Borough market) というオーガニック食品のマーケットに行った。ここは London Bridge 駅の高架下にあるマーケットであり、密集して百以上の店が様々な商品（野菜、肉、チーズ、ケーキ、花やお酒など）を売っている。チーズのきつい匂いや、肉を焼く美味しそうなにおいが充満していて、店を進むごとに周りの匂いが変わっていくのが面白い。なかなか移動できないくらい多くの客が来ており、大変活気のあるマーケットだった。



ハンバーガーやフルーツジュースなど、その場で買って食べられるものも売られていたので、“ソルトビーフ・アンド・ピクルス”というバーガー（のようなもの）とマンゴーやパイナップルなどのミックスジュースを買い、昼食を取った。

最後に、ミュージカル『マンマ・ミーア!』を見に行った。私は今回が初めてのミュージカル観賞だったのだが、役者の歌声に圧倒され、とても興奮した。また、観客は大変ノリが良く、拍手や笑い声、手拍子など、舞台の合間にいちいち反応をするので、言葉が分からなくても雰囲気を楽しむことができる。しかし、笑うべき台詞のシーンで笑えなかったのには、自分の英語力の低さを実感し、悔しく思った。とは言っても、拙いながらも道を尋ねたり、ちょっとした会話から見知らぬ相手と仲良くなったりするなどの出来事もあり、母語以外の言語を使って意思疎通ができるということが、自分と関わる人を増やしたり、行動の範囲を広げることができるのだということを、改めて実感した一日でもあった。

9. ロンドンで2つのミュージカルを見る

玉川佑香

出発前、私は今回のスタディーツアーの自由時間を利用して、ミュージカルを観る予定を立てた。なぜなら、先日公開されたミュージカル映画、『マンマ・ミーア!』のミュージカルがロンドンで公演されていることを知ったからである。映画を観た後にミュージカルも見たいと思っていたところ、偶然美容室で見た雑誌に、ロンドンでのミュージカルの様子が掲載されているのを発見した。ミュージカルと言えばアメリカのブロードウェイが本場であり、ブロードウェイのようなミュージカル街が、まさかイギリスにあるなど予想にもしていなかったため、その意外性に驚き、喜んだ。また、私には、高2の夏に行ったアメリカへの短期留学でニューヨークへ訪れた際に、ブロードウェイを通ったのだが、その時は時間の都合上ミュージカルを見ることができなかったという苦い思い出があった。そのため、私の中でのミュージカルに対する思いは、さらに熱くなってしまったのである。

今回の自由時間で私は幸運なことに、『マンマ・ミーア!』と『オペラ座の怪人』の2作品をも見る事ができた。イギリスのミュージカルは、主にロンドンの中心部にあるウェスト・エンドという地域にある劇場群に固まって上映されている。その劇場群のほとんど

がミュージカル専用の劇場であり、有名な作品にはその作品専用の劇場が作られていたが、中にはコメディ専用の劇場や、大きな映画館などもあり、「ミュージカル」だけを楽しむ人々だけでなく、人通りが多く非常に賑わっていた。

オペラ座の怪人を見た日には、会場近くにある大きな映画館で、今春に公開された映画『マリー』のプレミアが行われており、レッドカーペットがひかれた劇場前にはたくさんの人だかりができていた。

『オペラ座の怪人』は、名前にオペラとつく通り正統派のミュージカルのため、客層に富裕層が多かったように思う。この劇場では、席ごとに入り口が



分かれており、一番高価な席専用の入り口には、ブランド物を身にまとった人々が目立っていた。また、私たちは普段着で行ったのだが、中にはドレスやスーツなどの正装をしている人も少なくはなかった。また、日本人観光客がとても多かった。

私たちが座った席は 2 階席だったため、ステージはもちろんバックミュージックの演奏者や音響の操作など、1 階席では見られないようなステージの裏側まで覗き見ることができた。裏側の動きを見てみると、ミュージカルは舞台に出ている役者だけではなく、全員が協力し合って出来ているのだということに気付き、感動が倍增した。また、観客は歌声に圧倒され、終演には観客のほとんどがスタンディングオベーションであった。



最終日に観た『マンマ・ミーア！』はオペラ座の怪人のような厳かな雰囲気はどこにもなく、ミュージカルを楽しみたい人々が来ている庶民的な雰囲気であった。1 階席に座ったのだが、オペラ座の怪人の時ほど正装していた人は見当たらなかった。このミュージカルは ABBA の楽曲を取り入れたミュージカルで、ダンスや歌が中心のライブのようで、観客が出演者の歌に合わせて歌を口ずさんだり、踊ったりするような雰囲気であった。このミュージカルでは、ミュージカルの雰

囲気が曲と曲との間の観客の歓声がものすごい勢いだった。やはり、日本で観るミュージカルと比べて一番違うのは、観客の反応であると確信を持った。

今回、2 つの雰囲気が真逆と言っていいほどのミュージカルを見て、大衆文化の不変の人气と、その威力を肌で感じる事ができたように思う。また、日本と違ってミュージカルなどの観劇などの娯楽に対しては別に税がかけられること、チケットを売り払うために、街の至る所にチケットセンターがあったりと驚くことも多々あった。しかし、今日まであれほど多くの人を魅了する文化が伝えられているということは、本当に素晴らしいことであると感じた。これから様々な文化を学ぶにあたって、現代まで受け継がれる文化の根源となるものは何なのか、新たに視野に入れて考えていきたい。

10. フェアトレード・フォートナイト

高見早苗

イギリスフェアトレード財団がフェアトレードの啓発と推進のために、毎年開催する「フェアトレード・フォートナイト（フェアトレードの 2 週間）」というキャンペーンでは、イギリス国内各地でフェアトレード団体、市民団体、学校、教会、販売店などによる様々なイベントが実施されている。2009 年は 2 月 22 日から 3 月 7 日の 2 週間にわたって開催され、一日に何人の人がフェアトレードバナナを食べたかの新記録達成を目指した「ゴー・

バナナ」、フェアトレードに関連するグローバルな課題をもとにしたディベート、フェアトレードに関するポスターの掲示などの多彩な催しが行われた。筆者が参加したイベントについて報告する。

2月28日（土） 6 BILLION WAYS Making another World possible

WAR on WANT、JUBILEE DEBT CAMPAIGN、Friends of Earth など7団体が共同で開催したフォーラムでは、「Another world is possible」「Introduction to climate justice」「What does Obama mean for racial justice？」などのテーマでディベート、映画上映、音楽演奏、ワークショップが行われた。「What does fair food look like？」と題されたセッションでは、フェアトレードファンデーション、パレスチナオリーブ生産団体などからのスピーカーがグローバル化の中での持続可能な農業生産、フェアトレードの可能性などについて発言した

3月1日（日） CAFÉ DIRECT TASTEFAIR

イギリス国内有数のフェアトレード飲料専門会社である CAFÉ DIRECT が、2月21日（金）から3月1日（日）までロンドン市内の大型食料品店の一角で TASTEFAIR を開催し、ガーデニング講座、エコインテリア講座、バリスタによる実演、コーヒー焙煎体験などのプログラムが用意された。3月1日（日）は、メキシコのコーヒー生産者組合の検査官から、豆の種類、焙煎の具合、豆の挽き方などによる風味の違いなどの話を聞き、コーヒーのカップング（品質・風味の検査）を体験することができた。

3月1日（日） Christ Church Spitalfields Fair Trade Market

地区の有志により、Christ Church Spitalfields の敷地内で Fair Trade Market が開催され、JUST TRADE、TRADE CRAFT などのフェアトレード団体によるアクセサリー、雑貨、食品の販売、在住外国人による民族衣装、伝統手工芸品の販売、衣類や靴のリサイクルバザーなどのブースが出展されていた。地域住民と思われる家族づれや若者が訪れ、各ブースでスタッフとの会話を楽しんでいた。

3月2日（月） Museum of Childhood Welcome to Our world : Lives for Sale

2月28日（土）から10月4日（日）まで、Welcome to Our world : Lives for Sale と題された展示が行われていた。建物 2 階の児童書が展示されたコーナーの壁面全面に張られた大型ポスターは、人身売買されるチョコレート生産国の子どもの現状と、チョコレート消費国の子どもの関係、改善のために自分たちにできることを訴えていた。

3月7日（土） Christ Saviour Church Fairtrade Fair

EALING FAIRTRADE GROUP が主催して、Christ Saviour Church のホールを会場に開催された Fairtrade Fair には、地元のフェアトレード団体など 15 団体が出展し、ケニア、フィリピン、ネパール、ボリビアなどからの手工芸品や、イギリスの企業が生産したフェアトレードのチョコレート、コーヒー、紅茶などを販売し、多くの来場者で賑わっていた。高校生ボランティアによるフェアトレードカフェ、フェアトレードファッションショーや小学生によるフェアトレードに関する詩の発表などもあり、青少年も積極的に参加する姿が印象的であった。地区選出の市議会議員やメディア関係者も来場していたことから、地区に溶け込んだイベントであると感じさせられた。

1 1. リーズ大学訪問

高見早苗

リーズ大学に着くと、フェアトレードマークと LEEDS FAIRTRADE UNIVERSITY の文字が描かれた横断幕に迎えられた。この横断幕は、フェアトレード大学としてフェアトレードファンデーションに認定されていることをアピールしている。

まず、出迎えてくれた、William Young教授の案内でStudent Union（学生自治会）の建物に向かった。建物の周りでは、1個1£でチャリティードーナツを売る学生や活動紹介のパンフレットを配る学生の姿が多く、また、一階ホールの掲示板にはフェアトレードイベント、環境保護活動、貧困問題啓発など多くのポスターが掲示され、リーズ大学におけるソサエティ活動が活発であることが窺えた。ホールから地階へ降りた階段脇に、Student Unionが運営する小さな売店があり、ボランティアの学生がローテーションで店番を担当し、当日は2名の女子学生が販売に当たっていた。学生や職員は、ここで注文するとオーガニックの野菜や果物を購入することができ、売店横の廊下にはりんごやブロッコリーの入った箱が置かれていた。地階には、この他にも焼きたてのパンを販売するベーカリー、フェアトレードのTシャツも販売している衣料品店、カフェ・バー、ナイトクラブなどがあり学生達で賑わいをみせていた。

中でも食料品、生活用品、文房具などを扱う販売店は、スーパーマーケットのように広いフロアが多種多様な商品で埋められ、学生が必要な日常品がすべて揃うのではないかと思われた。ここではできる限りフェアトレードの商品を導入するように努めているとのことで、特にフェアトレードのチョコレートの品揃えは圧巻で、広い棚に大きな板チョコからスナックバーまで 20 種類ほどが陳列されていた。フェアトレードフォートナイトの期間中ということで、10%のディスカウント表示がされおり、このディスカウント分は販売店側が負担し、原料生産者や製造会社には負担を強いてはいないとのことであった。価格は、0.3£～1£と学生にとっても購入しやすい手ごろな価格であった。フェアトレード飲料のラインナップも充実し、コーヒーや紅茶はイギリスで販売されているほとんどのフェアトレードメーカーの商品が陳列されていた。フェアトレード以外の商品との価格差も僅かであることから、フェアトレードのものを選ぶ学生も多い

ということに頷ける。この他、バナナはすべてフェアトレードのもので、入り口の大きなボックスに山積みされ、ポスターの掲示などで目を引いた。また、大変珍しいフェアトレード・コーラも販売されて、学生に人気がありよく売れているとのことであった。ここでは、「社会的課題に対して関心が高い学生が多い」というベースの上に、「品揃えが豊かで手頃な価格」という販売努力があり、フェアトレードが受入れられているように感じた。

次に、School of Earth & Environment FACULTY OF ENVIRONMENT にて、William Young 教授、Anne Tallontire 教授よりイギリスのフェアトレード事情、リーズ大学におけるフェアトレード大学としての成り立ちと現状、フェアトレードに関する講座や活動について説明を受けた後に質疑応答の機会を得た。その内容を以下に要約する。

イギリスでは、フェアトレード製品は年間約 6 億 £ の売上有り、これはイギリスでの商品流通額の約 1 % 程度になる。これが大きいかわかりませんが、ここ数年でフェアトレード製品の販売高は拡大している。例えば、コーヒーは全流通量の 20% がフェアトレードのものになっている。この成功は、フェアトレードマークの普及によるところが大きい。フェアトレードファンデーションが牽引しているこのマークを活用することで、フェアトレードが一つの価値として認められるようになる。一方で課題も多く、流通している全ての製品の種類は多いが、その中でフェアトレードの製品の種類はまだ少なく、消費者が好みのものを選択することができない。また、マーケティングに関しては、大手スーパーマーケットで売るかどうかなどで、チャリティ側の人達と大量に扱う人の間で問題が出ている。たとえばスターバックスの独自の基準やレインフォーレストアライアンスとの競合などに関して、それぞれが同じ理念は持っていない。しかし、実際にはイギリスのコンシューマリズムの中では、4 つの大きなマーケットが 75% のシェアを持っており、イギリスの消費者は、地元の小さな店で良いものを買おうとするフランスと違い、大きな店で良いものを買おうとする。最近ではイギリスも消費のあり方が少しずつ変わってきている。このため、グループ企業やチェーン店で売る大きなところと、小さな草の根で動くところの両方を使う必要がある。そして、フェアトレードの啓発のためには、有名な人を広報に活用し、セレブリティがメッセージを発することで新しい暮らしへのニューブランドとしてフェアトレードを発信する必要がある。慈善活動などでは人々は動かない。フェアトレードを認知している段階から、習慣として購買活動に繋げていくかが課題となる。

リーズ大学がフェアトレード大学となったのは、一部の学生や教職員の中から大学内でもフェアトレードを推進しようという声が上がリ、フェアトレード委員会を結成して提案書を学校運営委員会に提出したことに始まる。フェアトレードの理念は、途上国の生産者の利益や環境保全のために倫理的な活動をすることであり、これは、リーズ大学の環境や保健に配慮した学校運営、学生育成の理念にも合致することから、学長の決断でフェアトレード大学になることを決定した。フェアトレードを通して国際開発問題や

地球的課題に関心を持つ地球市民としての教育を全学的に行えるようになるという利点もある。現在は、3人の教員がフェアトレードを講義の中で扱っている。School of Earth & Environment FACULTY OF ENVIRONMENTでは企業活動について学ぶ中で、講義やインターンなどの形でフェアトレードの学習が組まれている。例えば、Introduction to business, environment and corporate responsibilityの講義の中では「倫理的な根拠によるフェアトレード」「フェアトレード基準と他の基準の比較」などが取上げられている。また、大学の中で利用する品はできるだけフェアトレードのものにしている。いくらか経費負担があるが、それは理念を達成するためのものとして受け止められている。フェアトレードは理念だけでなく、実際の生活の中で習慣にしていけることが必要で、学生や大学職員の委員会がフェアトレードを扱っている卸屋を選ぶことなどを通して、フェアトレードの実践を進めようとしている。大学の地域との連携としては、リーズのフェアトレードのネットワークに加入し情報交換を行っている。

William Young 教授、Anne Tallontire 教授の説明を受ける中で、「学生の主体的な行動」と「大学トップの決断」がフェアトレード大学としてのリーズ大学を動かしているポイントであり、フェアトレードを、倫理、環境などの切口から論理的に学ぶことと、運動としての日常での実践という両輪が必要であることを再認識した。



リーズ大学入口に掲げられた横断幕
LEEDS FAIRTRADE UNIVERSITY



学生自治会館内の販売店にて
フェアトレードバナナとポスター



学生が運営するフェアトレードショップ

ドーナツを買ってチャリティを！

1 2. 世界遺産を見る

中原 麻衣

ロンドンの Paddington 駅で地下鉄一日乗車券を買い、地下鉄に乗り Westminster 駅に到着。ロンドンの地下鉄は tube としてロンドン市民に愛され、各路線が色で識別してあるので、観光客にもすぐに理解できる。Westminster 駅から地上に出ると、すぐ目の前にピーターパンにも登場するビッグベンがそびえ立ち、周りにはビッグアイやウェストミンスター寺院が立っていた。

約 1 時間かけてウェストミンスター寺院の中を見学した。ウェストミンスター寺院は西暦 960 年にベネディクト派修道院として建設された。1987 年にウェストミンスター宮殿、聖マーガレット教会とともに世界遺産の文化遺産として登録されている。ここでは日本語のガイド器機を借り、一つ一つ詳しい説明を聞きながら理解して回ることができた。ここでわかったことは、イギリスでは古いものを大事にする精神が残っているということだ。日本では古くなった建物は取り壊され、新たな建物を建築する。しかし、イギリスではウェストミンスター寺院をはじめとする町並みを見てもわかるように、昔ながらの建物が現在も数多く残っており、新たな建物も町並みを壊さないように建てられている。



ることができる。

ウェストミンスター寺院見学後、ロンドンの地下鉄一日乗車券はバスにも利用できるのもので、バスでナショナルギャラリーに移動した。そこからは各自自由行動。私は昼食をとってからナショナルギャラリーを見学した。イギリスでは自国の文化に誇りを持ち、その文化を国民全員のものだと思っているため、国民、そして他の国の人々に知ってもらうために、ほとんどの文化的な場所は無料で入

翌日は朝から大英博物館を見学した。大英博物館もまたナショナルギャラリーのように入場は無料だ。大英博物館は世界最大博物館の一つで、世界各地の美術品や遺跡、工芸品が約 700 点も展示されている。そのため、とても 1 日ではまわりきれない。イギリスでは子どもの教育は体験型が推奨されているため、私たちが行く先々で多くの小学生が社会見学に来て、スケッチしたり、学芸員から話を聞いたりして勉強していた。



大英博物館を見学した後、地下鉄で移動してロンドン塔とタワー・ブリッジを見学した。ロンドン塔は 1078 年にウィリアム 1 世によってロンドンを外敵から守るために建設を命じられてからヘンリー 3 世の時代に完成した。その長い歴史の中で、死刑囚の監獄としても利用された。この塔に入った者は生きては 2 度と戻れない。ロンドン塔は 1988 年に世界遺産に登録されている。

タワー・ブリッジはロンドンを流れるテムズ川に架かる橋のことである。その見た目は名前の通り、2 つの塔がそびえ立っているように見え、町やロンドン塔の景観と調和するように設計されている。タワー・ブリッジは船が通れるように可動式の橋だ。1894 年に完成し、建設した当初は水力を利用して開閉していたが、今では電力を利用している。タワー・ブリッジが薄い水色なのは、テムズ川と霧の町ロンドンと呼ばれるように、曇りが多いロンドンの町に合わせているのだろうか。この見学のあと、シャワーと呼ばれる通り雨が降ったが、このスタディーツアーの間、霧の町ロンドンの天気はとてもよく、雨に出会ったのはこのときだけだった。